
SILVER DANCE

影夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S I L V E R D A N C E

【Nコード】

N 3 7 2 9 W

【作者名】

影夜叉

【あらすじ】

スケット団と万事屋。

2つの何でも屋が、それぞれの世界で行ったり来たりをして、大騒動を引き起こす！！

真選組とスケツト団（前書き）

ほぼ勢いでスタート!!

真選組とスケット団

「ここが、真選組か」

「来るのは初めてやな」

『前はどちらも、真選組のキャラはいなかったからな』

真選組の屯所の前に、スケット団の3人はいた。

「けど、ええんか？万事屋に行かんで、先に真選組から行つて」

ヒメコは、ボッスンとスイッチに訊いた。

「平気だつて。早く行こーぜ」

ボッスンとスイッチは普通に入って行き、ヒメコは周りを見ながら入る。

「あ？何だ、おまえら」

屯所に入つてすぐ、煙草を吸う土方に会った。

「お、すごい！土方さんだ！」

「ちよお、土方スペシャル食べるとこ、見せてくれへん？生で見たいねん」

ボッスンとヒメコは、迫るように土方の前に行った。

「離れろ！何なんだ、おまえらは！？」

「あ！？オレ達か？オレ達は」

『スケット団っス！！』

ボッスンの台詞を遮るように、スイッチはパソコンの音声を最大にして、キーを打った。

「おいスイッチ！それ、オレの台詞！！」

怒るボッスンを、スイッチは無視する。

「スケット団？あア、おまえらがそうか」

「お、知つとるんか？」

「学園版万事屋だろ？」

「ちがーう！！」

土方の言葉を、ボッスンとヒメコは同時に否定する。

「いや確かに、そう比喻されるかもしれないけどさ、こっちとそっちは、やってること違うから！！」

「これ、お土産のペロキャンの詰め合わせ。マヨネーズ味もあるで」

早々に気持ちを切り替えたヒメコは、土方にペロキャンの入った箱を渡した。

「オレの話聞けよ!!」

と、スイッチの姿が、いつの間にか消えていた。

「あれ？スイッチ？」

辺りを見回していると、モモカの着ボイスが流れた。

『ユーガッタメール!』

「ん？誰からだ？」

『差出人…スイッチ

件名…暇だからさあ (<―>)

本文…先に万事屋に行ってまーす (≡▽≡)
ヒメコにも言っておいてネ☆』

「あいつ、いつの間に行っただ!？」

メールを見て、ボッスンは叫んだ。

「どないしたん？ボッスン」

「スイッチの奴、もう万事屋に行っちゃったって!」

「別にええやないの。アタシこの後、江戸の街見て回るで」

「は!?! おまえも!?! 万事屋はどうすんだ!?!」

「後で行く。それより、ボッスンもどうや?」

「よし、行く」

「おまえも行くのかよ!?!」

話を聞いていた土方は、思わずツツコんだ。

「じゃあ、オレ達はこれで」

「またペロキャン持ってくるで!」

ボッスンとヒメコは、屯所を後にした。

「あり? 土方さん、スケツト団の連中が来てたんじゃないんですかい?」

2人と入れ替わりに、沖田がやって来る。

沖田は、土方が持っている箱に気付く。

「何ですか? その箱」

「さっき鬼塚が置いていった」

「へー、どれ」

そう言うと、沖田は箱を開ける。

「てめっ、勝手に開けんな！」

「おっ、これがペロキャンってやつか」

チュッ○チャプスに限りなく似たキャンディが、箱に幾つも入っている。

沖田は、その中の一つを取り、舐めた。

「うげエッ！！」

舐めた瞬間に、沖田はその場で嘔吐した。

「汚エな！！何吐いてんだ！！」

「こ、こいつア、予想以上の味だ…。もういいです」

「吐くんだったら舐めんな！！」

と、土方は箱の中を見て思った。

（あれ？無い……）

「おい、総悟」

「はい？」

「おまえ…、何味食った？」

沖田は、包み紙を開いて見せる。

「マヨネーズ味でさア」

「何食ってんだアアッ!!」

「あ、俺の食い掛けで良ければどうぞ」

「いるか!!」

土方は箱を漁り、もう一つないかと探した。
すると、箱の底に『…ーズ味』と書かれたペロキャンがあった。

「よし、食うか」

「土方さん、そんなモン食うんですか」

「てめエには、やらねーよ」

「いえ、いりやせん」

包み紙を取り、加えた。
その時だった。

「うげエエッ!!」

舐めた瞬間に、土方は嘔吐した。

「何だ…この味!?!」

包み紙には、『ブルーチーズ味』、と書かれていた。

「土方さん、何吐いてんですか？最後まで舐めて下さいよ」

沖田は黒い笑みを浮かべて言った。

「てめえ…、この味だって分かってただろ！？」

「だから俺は訊いたんです。『そんなモン食うんですか』って」

「総悟オオオツ！！」

土方は刀を抜き、沖田を追い回した。

「すいませーん。マヨネーズ味のペロキャン、一箱下さい」

その後、土方は『スケッチダンス』の世界に行き、マヨネーズ味のペロキャンを大量に購入したという……。

真選組とスケツト団（後書き）

次回から、原作のリメイク的なことをします。

クエスト・ダンス 武器を手に（前書き）

遅くなりましたが、外伝的な話です。

クエスト・ダンス 武器を手

かくして、予期せぬ職業ジョブになってしまった、6人の勇者は、魔王との決戦の前に、あることを思い出した。

「あ！アタシら、武器とかなんも持っていないで！」

職業が決まった後、『ぶどう農家』のヒメコが言った。

「確かに。武器がなければ、戦えないな」

『僧』のツバキも頷く。

僧らしく、片手を上げている。

「武器とかって、どこで手に入れるの？」

『舞踏家』のサーヤが、大神官のアガターに訊いた。

「あー、武器か？それならな、この王都・カイメーンの外れに『なんでも屋』 っつー胡散臭エ店がある」

「今、胡散臭エと言ったぞ…」

『あっちゃん』の明智が、動きまわりながら呟いた。

『端から見ていると、異様な男だな』

あっちゃ、あっちゃ言いながら動き続ける明智を、『手品師』のス

イッチは眺めている。

「そのなんでも屋に、てめーらの職業を伝えとく。てめーらに合う武器を揃えてくれんだろ。多分」

「多分！？ 確証ねエのかよ！！」

ボッスはアガターに詰め寄る。
ちなみに、職業は『スライム』だ。

「うっせーな。その店の奴らは、クセがありすぎなんだよ！」

アガターは、ボッス達の職業を書いた紙をフクロウに付け、飛ばした。

「魔王をぶっ倒せるんは、てめーらだけだ。とっとと魔王のダンテ
ル倒してこい」

翌朝、6人は王都の外れにあるなんでも屋に行った。

「……ここだよな？ なんでも屋」

ボッスは建物を見上げて呟く。
建物は、昨日のハローワーク神殿と同じような外観に、木製の看板に『なんでも屋』と書かれている。

『確かに、胡散臭いな』

「けど、ここでしか武器、手に入らないんやろ？ 行くしかないで」

「そ、そうだな。こんにちはー」

中に入ると、鎚を叩く音が聞こえた。

「お、鍛冶屋もかねてるんか？」

「はい。一応かねてます」

「待ってたネ！」

2人の男女が6人を出迎えた。

「『アシスタント』のカグーラネ！こっちはダメガネのぽっつあん
アル」

「ダメガネとか言うなアアアッ！！」

「なんや、外伝的な話でも、こんな感じか」

カグーラとぽっつあんのやり取りを見て、ヒメコは言った。

「アシスタントって、鍛冶の？」

「いや、俺のだ」

サーヤが訊くと、1人の男が出て来る。

「『職人』のギンだ。アガターから話は肩聞いてる」

ギンの肩には、アガターが飛ばしたフクロウが乗っている。

「職人？ 剣とか、武器のですか？」

職人という言葉聞き、ツバキが訊いた。

「いや、パトリオットだ」

「何でだよ！！」

「冗談だ。俺は、剣でも槍でも何でも作れる職人だ」

「何でもいいかい…」

『それより、オレ達の武器はどうなっている？』

スイッチが、ここに來た目的を言う。

「用意してるネ！」

「こっちです」

別室に行くと、机の上に武器らしき物が幾つか置いてあった。

「僧とぶどう農家と、舞踏家の武器を先に用意しといた。取れ」

机には、木の棒と高枝鋏、バトンがある。

「何だ！？ この木の棒は！？」

「高枝鋏って…！ぶどう農家に高枝鋏は必要ないやろ…！」

「このバトン、徒競走とかに使うバトンじゃない！舞踏家にこのバトンって、アンバランスじゃん…！」

3人は、激しいブーイングを言う。

「オレ達のは？」

「あ？おまえらか？ちょっと待ってろ」

3人を無視して、残りのメンバーの武器を用意する。

「手品師とスライムとあっちゃなんて職業、そうそうに聞かないネ」

「それにスライムって、職業じゃないですよ。敵キャラだと思うんですけど」

「オレだって好きでなったんじゃないよ…！」

ボッスンはじゃんけんでヒメコに負けた為、スライムになった。

「おい、おまえら。武器はこっから好きなのを取れ」

「え？好きなのいいの？」

残った3人は、ギンが持ってきた箱を見る。

中には、ハリセンに箒、フライパン、爪きりが入っていた。

「何だこれ！？ハリセンとかフライパンって、コントの道具か！？」

「とりあえず手品師。おまえ箒でも使え。空飛べるぞ」

ギンはスイッチに、箒を差し出す。

『箒だと？オレは手品師だ。魔法使いじゃない』

「おまえは断るんかい！」

『当然だ。空を飛んだら、タネも仕掛けも無いだろう。手品師として、魔法の類いは使いたくない』

「何だその、手品師のこだわり！」

「武器が決まんねエのか？」

薄めの本を持った男が、部屋に入ってくる。

「ん？なんだ貴様」

怪しげな雰囲気、ツバキは警戒しながら訊く。

「俺は『鍛冶屋』のタカスギだ」

「何であんたが鍛冶屋なのよ！！」

あまりのギャップに、サーヤが言った。

「何だっていいだろ」

タカスギは、持っていた本を見せた。

「これに載ってる材料を持ってくれば、好きな武器作ってやるよ」

「ほんとか!？」

ボッスンはすぐに、本を見た。

他のメンバーも、同じように覗き込む。

「何やこれ…」

「これは…」

そこに載っていたのは、今のレベルでは到底倒すことは出来ないモンスター^モの牙や皮が、ずらりとあった。

「今のレベルで倒せる訳ねーだろ!!」

「倒しに言っても、返り討ちに遭うぞ!」

ボッスンとツバキは、それぞれ言った。

「その材料さえありゃ、六幻だろうが天鎖斬月だろうが作れんだが」

「ほんとに何でも出来るんかい!」

「無理なら、その武器で我慢しろ」

タカスギは指を差しながら、「そう言えば」と呟く。

「ダンテルは、『砂の魔人』と手を組んだらしいぜ」

「砂の魔人？」

「ダンテルと同じ位厄介なヤローだ」

ギンはぼそりと言い、砂の魔人についてを話す。

「そいつの名前はゾーラって言ってな、手を組まれたことで、闇の力が増しちまったんだよ」

「え！？じゃあ、どーすんのよ！」

予想外の話に、サーヤは声を上げる。

「ただの武器じゃ倒せねー。『聖なる巫女』の力がなきゃな」

「聖なる巫女？」

「どこにいるんだ？」

ツバキと明智が訊くと、遠くから声がした。

「来ましたよ！」

ぱっつあんが言うと、1人の少女が入って来た。

「初めまして。聖なる巫女のイヴです」

「ええ！？刹那さん、イヴとしての登場！？」

「そこにある武器を使う方は言って下さい。私の力で強化します」

「強化ったって、こんなんで戦ってもなあ…」

『いや、高枝鋏も使いようによっては近距離や遠距離の攻撃に使えるぞ。それに、木の棒も加工すれば武器になると思うが』

「流石スイッチ！」

数人が、声を揃えて言った。

「ほな、この高枝鋏の強化頼むわ」

「ボクもこの木の棒を加工しよう」

ヒメコはイヴに高枝鋏を渡し、ツバキは棒を削り始める。

「あ、じゃあアタシ、この箒使っている？」

サーヤは、先程スイッチが持っていた箒を手取る。

「箒を持った舞踏家？」

「そんなん持って踊るのか？」

「何よ！いいじゃない！箒で空飛ぶ舞踏家がいたって！！」

「その箒は、時速数百キロ出せて、熔岩の中に落としても燃えねぞ」

「凄い箒やな！」

「ボクはどうしようかな…」

「あっちゃんのイメージだと、ハリセンとフライパン持ってた方がいいんじゃない？」

「ええっ！？」

明智の武器を、ギンは投げやりな感じで決めてしまう。

「スイッチ！オレ達の武器、どうする！？」

『ボッスン、ダメ元でモンスターを倒してくるテがあるが…。行くか？』

「行く！！」

「ちょお、おまえらほんとに行くんか！？」

「行ってくる！オレ達はモンスター倒して、すんげエ武器作るからな！！」

そう言うと、ボッスンとスイッチは外に飛び出して行った。

「絶対返り討ちにされるで…」

30分後。

ボッスンとスイッチは、傷だらけになりながらも、何かを担いで帰って来た。

「おーい!!」

『ヤンドギラ、捕ったどー!!』

「おるんかい、ヤンドギラ!!」

ヒメコを無視して、2人はヤンドギラをタカスギに差し出す。

「さあ、武器を作ってくれ!」

タカスギは煙管を加えながら、2人を一瞥し、空いた手を上げた。

「それ、却下デース☆」

「何ふざけたこと言ってんだ!! 無駄骨じゃねーか!!」

「スライムに骨は無いと思うネ」

激昂するボッスンを、カグーラはジト目で呟く。

「冗談だ。ヤンドギラから出来る武器は、かなり強力だ。おまえらに扱えるかどうか、分かんねエぞ」

「…面白エ」

『どんな武器でも、使いこなしてみせる』

「そうかよ…」

意味深な笑みを浮かべ、タカスギは呟いた。

「漆黒の夜明け」

「うむ。まもなくだな」

魔王の城で、ダンテルとゾーラは話していた。

「カイメーンが我々の物になるのは、もうすぐだ」

ゾーラが怪しく笑っていると、ダンテルは外を見た。

「！迫る脅威」

「何？まさか、勇者が来たというのか！？」

外では、『聖なる高枝鋏』を持ったヒメコ、『手作りの杓』を持ったツバキ、『空飛ぶ箒』に乗ったサーヤ、『フライパン』と『ハリセン』を持った明智がいた。

『オレとしては、かなり不本意だぞ！』

「文句言うなって！オレのも、見た目的におかしいけどさ」

そして、『ニワトコの杖』を持ったスイッチと、『降魔剣』を持っ

たボッスンがいた。

『オレは魔法使いではないというのに!!』

「あのクソ職人と鍛冶屋!! 何でこんな剣作ってんだよ!!」

「それ抜いたら、炎出るんちゃう?」

「どれ…」

ボッスは剣を抜いた。

すると、全身が青い炎に包まれた。

「青いスライム…」

武器を手にした勇者達は、魔王を倒すことができるのか!?

「出来るかあ!!」

クエスト・ダンス 武器を手に（後書き）

アニメの銀魂とスケダンのコラボがめちゃくちゃ笑えた。
今日のスケダンも早く観たいー！！

コラボが終わって（前書き）

グダグダな話です。

ほぼ作者の感想みたいになってます。

コラボが終わって

ここは万事屋。

リビングのテレビで、万事屋メンバーとスケット団メンバーは、お互いのコラボアニメを観ていた。

「いやー、結構良かったですね」

見終わり、新八がテレビを消した。

「オレ…、顔が全然違う……」

ボッスンは涙を流しながら、卑屈になる。

「俺の目の色違うな。原作基準？しかも、スケットの方がかっこいいし」

「でも、ところどころで顔つきが違うネ。希里みたいな顔になってたところが一杯あったアル」

満足そうな銀時に、神楽がズバツと言った。

『銀魂の方が先に放送されたからな。オレ達の方は、違う所が幾つかあったな』

「作者は、銀さんとスイッチの杉田呼びが見たかった、って嘆いてたで」

「最後まで万事屋に行く！じゃなかったネ」

神楽は、テーブルの上に置いてあるせんべいを取った。

「そうやな。銀魂の方じゃ、銀さんとボッスンの股間は、原作通りカナヅチになってたけどな」

ヒメコもせんべいを取りながら言った。

「まあボッスンも、股間がカナヅチになった言うても、スケツトの方と変わらん扱って感じやったな」

『確かに。今までにも、顔がえらいことになったり、身体が棒になったりしたからな』

「人事みたいに言うな！あれ、すっげえ凹んだんだぞ！！」

ボッスンは泣きながら叫んだ。

「あと、新八が消えても、あんまり支障はなかったと思うネ」

「どういう意味だアアア！！」

神楽は新八を無視して、せんべいを食べる。

「私もビバゲーに出たかったネ！」

ビバゲーを観戦していたせいか、出てみたかったと思う神楽。

「そう言えば、スイッチとデージーさんが言い合ってた所、声だけ

で見れば、銀さんとさっちゃんやで」

「あ、そう言えばそうですね」

『このシーンだな』

スイッチはパソコンを見せ、その時の映像を見せる。

「おっ、これや！」

「ただの毒舌トークじゃねーか」

『なら、こういうのはどうだ？』

スイッチはパソコンを自分に向け、キーを打つ。

「何してるんですか？」

しばらくしてから、スイッチはキーを打つのを止め、不敵に笑った。

「何笑っとなねん！気持ち悪っ」

『「さすがスイッチ！」のコーナー☆』

「いきなり何だよ」

銀時は胡散臭そうにスイッチを見る。

『先程、オレと毒舌女が言い合っている所が、杉田とさっちゃんのようだと言っていたな』

「それがどなんしたん？」

ヒメコが訊くと、スイッチは黙ってパソコンの画面を全員に見せる。そこには、スイッチとデージーではなく、銀時とさっちゃんが映っていた。

「おい、なんだこれ！？何で俺とさっちゃんに変わってんだ！？」

『同じ声という訳で、人物だけを変えてみた』

「面白そうアル。ちょっとやらせて」

神楽はキーを、ほぼ適当に打つ。

「出来たネ！」

画面には、赤いペンキ塗れになった新八が。

「何で真っ赤なんだ！しかも全身ペンキ塗れで、眼鏡だけが無事かよー！！」

「文章じゃ、全然分からんな」

「眼鏡が無事なんだから、文句ないだロ」
ほんたい

「眼鏡と書いてほんたいと読むなアアッ！！」

新八と神楽のやり取りをよそに、銀時もキーを打ち始める。

「よし…!」

「ん？ 銀さん何して……な!？」

画面を覗き込んだボッスンは、ギョツとした。

「こんな感じだろ？」

画面には、糞を投げるヒメコと、逃げ回るスイッチが映っている。

「ちよお、あんた何作つとんねん!！」

当然だが、それを見たヒメコは激怒する。

「これ、ビチグソ丸が、銀ちゃん追っかけてた時の話ネ」

「ビチグソ丸言わんでえええっ!!」

『そう言えば、作者はスケットの冒頭を観た時、ヒメコもビチグソ丸になって猿を捕まえろ!とか叫んでいたぞ』

「ホンマ猿から離れて!しばくぞ!!」

薫風丸を手に、ヒメコは怒鳴った。

「じゃあ、話変えるけどよ」

銀時はせんべいを食べながら、話題を変えた。

「おまえら、今度は『バクマン。』とコラボするって?」

「またコラボの話!？」

「バクマン。のコラボは無理だな。作者はアニメ観てても、原作は読んでねーし」

「作者の話はいいだろ！」

ボッスンは透かさずツッコんだ。

「よし、俺達もどっかとコラボしに行くぞ」

「賛成アル！」

「何コラボしようとしとんねん！」

「『青の祓魔師』とコラボするか。おまえら、スクエアに乗り込むぞ」

ジャンプスクエアを読み、銀時は言う。
神楽も乗り気だ。

「待って下さい、銀さん！」

新八は前に出て、毅然として言った。

「お、上手く説得するんか？」

「青エクのアニメは、もう終わりました！コラボなんか出来ません
!!!」

「そっちかい!!」

「早速、正十字学園に行くぞ!」

銀時達は外に出て行く。

その後を、ボッスンとスイッチもついて行った。

「何でおまえらもついて行くんや!!」

『かくして、コラボの反省会は、正十字学園で続行されることになった』

「なるか!ほんで、おまえが締めるな!!」

コラボが終わって（後書き）

青エタのコラボとかも出来ないんで、本気にしないで下さい。

改じてくれようオズの魔法使い（前書き）

いろんなネタをぶち込んだ話になりました。

神楽…、ちょっと遅れたけど誕生日おめでとう。

改じてくれようオズの魔法使い

「わっはっはっ。用と言うのは、他でもない」

スケット団の部室に、校長の唐松源三郎が来て言った。

「今度、孫の吉彦の誕生日なんだが、また紙芝居を作って欲しいんだが…」

「紙芝居？」

『なんだかんだで、以前の桃太郎も気に入ったと言っていたな』

以前、大幅にアレンジをした桃太郎の紙芝居に、校長は嫌な顔をしていたが、吉彦は気に入ったと言う。

「個人的な頼みだから、吉彦が気に入ったら部費をアップしてあげよう」

「マジっスか！？やった！！」

「さてと、今度はどんな話にすっか」

『前回の桃太郎は和風の話だったからな。今回は、洋風にするのはどうだ？』

「おっ、それええやん！」

「洋風なら無難に、シンデレラとか白雪姫にするか？」

テーブルに置いてあるクッキーを食べながら、ボッスンが言った。

『それだとオチが似通っていると思うぞ』

スイッチはだめ出しのように言う。

「ほな、何がええねん」

「じゃあ、オズの魔法使いはどうだ？ビスケット・ダンスでもやってたし」

『賛成だな。登場人物も多く、いじりがいがありそうだ』

「なら決まりやな」

「オズの魔法使い、改変作戦スタートだ！！」

【アメリカのカンザスに、ドロシーという女の子が】

『意義あり！』

桃太郎の時と同じく、始まってすぐにスイッチが発言する。

「早っ、今回もまた、始まって数文字だぞ！！」

「何の問題があるんや。地域は変えたらアカンで」

『地域は変えない。が、ただのアメリカにする必要はないんじゃないか?』

それを聞き、ボッスンとヒメコは頷き合った。

「そうやな。もっとう、未来的な感じにした方がええかもな」

「…よし、こんな感じでどうだ?」

【近未来のアメリカ、ハイテクシティ・カンザスに、ドロシーという女の子が愛犬のトトと】

「お!SFっぽくなったやん」

【OG・3型とおばあにゃんと住んでいました】

「ちょお待てえ!!」

登場人物に、ヒメコは透かさずツッコむ。

「桃太郎の時と同じ登場人物やないか!」

「いいんだよ。吉彦個人に見せんだから、知ってるキャラがいりや面白ェだろ」

「おじさん、おばさんとちゃうやんけ!!」

【ある日、特殊気象衛星のトラブルから来る電磁波で、巨大な竜巻が発生してしまいました】

「何やねん。特殊気象衛星って…」

【ドロシーとトトは、家ごと竜巻に飛ばされてしまいました】

「ここは普通やな」

【OG・3型とおばあにゃんは、ラスベガスのカジノに行っていたので無事でした】

「はい意義あり!!」

カジノに行っているOG・3型とおばあにゃんのイラストに、ヒメコは叫ぶ。

「ドロシーが大変な目に遭ったのに、何やっとなるんやこいつら!!」

「いや、カジノで金を稼いで、家をリフォームしようとしてたんだよ!!」

『家はかなりボロボロだった為、飛ばされてしまうのも当然だ』

カジノで、ブラックジャックをするOG・3型と、ルーレットをするおばあにゃん。かなり稼いでいる。

「【OG・3型とおばあにゃんには、ギャンブラーとしての才能がありました】」

「必要あるんかそれ!? こいつら稼ぎすぎや!!」

『その後、カイジのような究極ゲームに』

「いらんわ！早よドロシー出せや！！」

「分かった、分かった。続きいくぞ！」

【家は何時間も飛び続け、そして落下しました。そこはオズの国という不思議な世界でした。そして】

捕まっているドロシーのイラストを出す。

【悪い魔女を家の下敷きにした為、ドロシーは殺人の現行犯として捕まりました】

「なんで！？」

『悪い魔女と言えど、殺人は殺人だ』

家の下には、大量の血と魔女の足が見えている。

「明らかに事故やろ！ほんで、こんなにグロくするな！！」

「賑やかですね」

窓が開き、見ると万事屋メンバーがいた。

「銀さん達だ！」

『新訳ミロス以来だな』

「内輪ネタは言わんでええ」

ヒメコはツツコみながら、スイッチを叩く。

「何してんだ？」

「おう、銀さん達もアイデア出さねーか？紙芝居作ってんだ」

ボッスンが誘い、銀時達は部屋に入った。

「紙芝居？」

「何の話アルか？」

「オズの魔法使いだ！」

「もう訳分からん話になっとるけどな」

出来ている紙芝居を受け取り、銀時達を見る。

「凄い話ですね…」

「面白いアル！」

「続きはどうなってんだ？」

「続きはこんな感じだ」

【冤罪は晴らすのなら、エメラルドの都にいるオズの王様に無実を

証明することです。と、北の魔女に言われました】

「で、ドロシーはトトと一緒に、エメラルドの都に行く訳だ」

イラストには、二足歩行をしたトトが、手錠をされたドロシーを連行して前を歩いている。

「なんで飼いだに連行されてんですか!？」

「何時の間に二足歩行出来るようになったんや、トト!！」

新八とヒメコは、それぞれツツコんだ。

『オズの国は不思議な世界。トトは二足歩行の他に、会話も出来るようになった』

【（しめしめ、殺人犯を王に差し出せば、懸賞金が山ほど手に入るぞ）】

ドロシーに見えないよう、トトは黒い笑みを浮かべた。

「最低やなトト!！」

「何ですかこれ!いきなり殺人犯扱いされて、飼いだに連行されて!！」

「こんな嫌や!ドロシー可哀想や!！」

「おい、おまえらちょっと黙ってろ」

「ツッコみまくるせいで、全然話が進まねえ」

銀時とボッスンは、迷惑そうに2人を睨む。

「何だと!!」

「何やと!!」

『ヒメコ。今言うのも何だが、今日はゴミ当番の日だ』

「今言うな! つか、前にもあったな、それ!!」

「あ、じゃあ僕が行ってきましようか?」

新八が言うが、ヒメコは首を振る。

「ええよ。なんだかんだで、今日はアタシが当番やし」

「なら新八。ちょっとコンビニ行って、苺牛乳買ってきて」

ゴミ箱を持ったヒメコの近くで、銀時が言う。

「は!?!」

「あ、酢昆布も」

「オレ、みかんゼリー」

『愚民グミ!』

「何頼んでんだアアア!!」

「やっぱ、何かねーとな。考える時は」

「…まあいいや、とりあえず行ってきました」

「もうちょい、まともに話進めとけ。アホ共!!」

新八とヒメコは、乱暴に扉を閉めて出て行く。

「おお、ナイスプレイだ。銀さん、スイッチ!」

『今回の話も好きだぞボッスン』

「私も気に入ったネ」

「この調子で、ガンガン進めてこうぜ」

それから10分後。

部室の前で、新八とヒメコは合流する。

「あ、ヒメコさん」

「ん? 買ってきたんか?」

「はは…、一応買ってきましたよ。ついでに、ヒメコさん用にペロキャンも買いました」

「気が利くやん。何味や?」

「コンビーフ味です」

「これも結構美味いんや。ありがとうな」

2人は、部室のドアを見る。

「ちょっとは進みましたかね」

「まともな話になつとるのを信じたいわ」

ドアを開けると、部屋には桂とダンテもいた。

「あれ、桂さん？」

「ダンテもおるで」

「おう、おまえらが出てった後に、入れ替わりで来たんだ」

「そのおかげで話はかなり進んで、もうクライマックスだ」

「早っ!!」

銀時が言うと、新八は驚いた。

「ここぞとばかりに進めよったな……」

呆れつつ、2人はソファに座った。

「で、どんな内容になったんや？」

「何も言わないんで、言って下さい」

「会心の出来だぞ！」

自信たっぷり、桂が言う。

「必ずウケるアル！」

「じゃあ始めるぞ！」

【野を越え、山を越え、ドロシーファミリーは守護者と共に、西の魔女の城へやって来ました】

「ドロシーファミリー！？」

「守護者って…、もう嫌な予感しかしないんですけど……」

【はたけカカシ】

「そうきたか…！」

「マスク覆面の忍」

どうやら、ダンテのアイデアらしい。

【鎧のアルフォンス】

「ぐっ…！」

【アニマルリングのナッツを引き連れて】

「ツッコみきれんで……」

【遂に、西の魔女・川上は目前となりました】

「川上もおるんかい!!」

【ところがそこに、トト將軍率いる猿軍えんぐんがやって来ました】

「トトは何しとんねん! あっち行ったり、こっち行ったり」

トトの後ろには、武装した猿が何匹もいた。

その中に、寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンクⅡフェザリオンアイザックⅡシュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をしているようではないのを僕は知っている留守スルメめだかかずのここえだめめだか:このめだかはさつきとは違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうペペペペペペペビチグソ丸もいる。

「ツッコみきれんわ!!」

【「えいっ!」「やあっ!!」 守護者達の猛攻に、トト達はひとりたまりもありませんでした】

「そりやそうやろ」

カカシは雷切らいきりで猿達をやっつける。

「サンダーカット」

「雷切って言えや！」

ドロシーはナッツを形態変化させ、前線カンビオ・フォルマで戦う。

「他のメンバー必要ないじゃないですか！！」

「何やこいつ！チート過ぎるわ！！」

「これは、1人ではなく、皆と協力する大切さと裏切りがどういう結末を迎えるかを描いていることで…」

「いらーん！！」

説明をする桂を、ヒメコはひっぱたく。

そして、完成した紙芝居を、校長に披露した。

「【こうして、ドロシーファミリーは川上を倒し、オズの王様に報告をして、晴れて無実になりました】」

ボッスンが状況を読み、ヒメコが台詞を読んでいる。

「【ドロシーは王様の作ったどこでもドアで、カンザスに帰ることになりました】」

「【「その犬は煮るなり焼くなり、好きにしてね】」

「【ドロシーは裏切ったトトを置いていき、守護者達に別れを告げて帰って行きました】」

校長は黙って紙芝居を聞いている。

【カンザスに帰って来たドロシーは、大富豪になったOG・3型とおばあにゃんに再会し、ボンゴレファミリーに入る為、イタリアに旅立って行きましたとき。めでたし、めでたし】

「…っー話なんスけど…」

ボッスンが訊いてから、しばらく沈黙が流れる。
そして、校長は言った。

「それ、却下デース☆」

改めてくれようオズの魔法使い（後書き）

犬が喋るというのは、私が中1の時に劇でやったオズの魔法使いをモチーフにしました。

あそこまでふざけてませんが…。

あの素晴らしい女装をもう一度（前書き）

タイトル通り、あいつらが女装します!!

あの素晴らしい女装をもう一度

「よしっ！完成！！」

放課後の部室で、ボッスンは嬉しそうに言う。

「ん？何が完成したんや？」

ヒメコはテーブルを覗き込む。

「何って、クロスワードパズル」

「……暇やな、おまえ」

「別にいいだろ！これ応募すれば、商品券が当たるかもしれないんだぞ」

『オレも協力したからな。ボッスン、当たったら山分けだぞ』

「1人でやったんとちゃうんか…。で、商品券っていくら分？」

「2000円分」

「安っ！！」

と、窓の開く音がし、同時に聞き覚えのある声がした。

「おい、スケット団！」

「ん？」

「銀さんか？」

窓の方を見て、3人は絶句した。

「何やねん、その格好！」

『そんな趣味があつたのか、杉田！』

「うっせエ！訳ありなんだよ！！」

銀時の格好は、女装をしたパー子の出で立ちだった。

「なんで女装してんだよ」

「かまっ娘倶楽部でバイトしてんだよ！人数足んねーから、駆り出されてんだ」

西郷に、脅しに近い形で駆り出され、銀時はバイトをしていた。

「ぱっつあんとかも、バイトしてんのか？」

「いや、別の依頼に出てる。チクショー、サボれると思ったのによ
ゝ…」

頭に手をやり、銀時はブツブツと愚痴を言う。

『それで？何か用があつて来たんだろう？その女装を見せに来たよ

うには見えんが』

「ああ、そうだった。……ボッスン、杉田」

銀時は、一瞬ニヤリと笑った。

「おまえら女装して、こっち来い」

『断る!!』

「嫌だよ!! なんでまた、女装しなきゃなんねんだよ!!」

ボッスンとスイッチは、透かさず拒否すると、ヒメコの姿が見えないことに気付く。

「あれ、ヒメコは？」

「おまえら女装するんやろ？ 椿連れて来たで」

ドアが開き、椿を連れて来たヒメコが現れる。その後ろには、生徒会のメンバーがいる。

「鬼塚、いきなり何だ!?! こんな所に連れて来て!!」

連れて来られた椿は、迷惑そうに言った。

「さつき銀さんがなー、ボッスンとスイッチに女装しろって言うってたんや。せやから連れて来た」

「あんた何考えてんだ。会長に女装しろというのか!?!」

希里は、怒鳴るようにヒメコに言う。

「ほな、おまえも女装するか？」

「なんでそんな話になるんだ!？」

と、外からヘリの飛ぶ音が聞こえてくる。

「ん? 何だ!？」

銀時は振り返り、外を見る。

同時に、丹生が携帯を閉じる音がした。

「丹生グループのヘリか!？」

「まずい、逃げろおーっ!!」

しかし、逃げられる筈も無く、4人は再び女装をさせられた。

数十分後、4人はメイクをされ、女物の着物を着せられた。

髪の毛の短いスイッチと椿は、鬘を付けている。

「きゃああああー!!」

ヒメコや丹生、デージーは歓喜の声を上げた。

「やっぱり、おまえらかわいい!! 何やねん、ホンマ!!」

「相変わらず、うるせえな…」

ボッスンは、白い花をあしらった赤い着物に、百合の形をした髪飾りを頭の左側に付けている。

『また女装させられるとは思わなかったな』

黒のロングヘアーの鬘を付けたスイッチは、若草色の着物を着ている。

「何でオレまで…」

希里は髪を整えられた後、青い簪を付け、藤色の着物姿になっている。

「サス子はまた黙っているな」

女装をしてから、ずっと無口な椿に、デージーが言った。
椿はウェーブ掛かった茶髪の鬘を付け、ボッスンと色違いの青い着物を着て、巾着を持っている。

「準備も出来たことやし、おまえら行くで！」

「…何でこいつが仕切ってんの？」

ノリノリなヒメコに、銀時は若干引く。

そして、女装をさせられた4人と、ヒメコと生徒会メンバーは、銀時の案内でかまっ娘倶楽部へやって来た。

「パー子、遅かったじゃない。いい娘、連れて来たの!？」

西郷は、ものすごい剣幕で、銀時に詰め寄る。

「あ、ああ。全員高校生だが、4人連れて来た……」

銀時はビビりながらも、後ろにいる4人を見せる。

「右から、ボス子にスイ子、サス子にキリ子だ。後ろの女共は付き添いな」

「この娘達、カ〜ワ〜イ〜イ〜」

「ちょっとパー子オ、何かかわいい娘達連れて来てんのオ？」

周りにいるオカマ達は、4人に大絶賛だ。

「おい、こいつら未成年だからよ、あんま変なことやらすなよ？」

「分かってるわよ。この娘達は、客の呼び込みとご用聞きしてもら
うから」

西郷は、呼び込みにボッスンと椿、ご用聞きをスイッチと希里に分
担する。

「ちょっと待て。何で会長が客寄せなんだ!？」

希里は不満そうに西郷に言う。

「サス子がかawaii過ぎるからよ。あんなかわいい娘がいれば、客が沢山来るからね」

この隙に銀時は逃げようとするが、西郷に襟首を掴まれる。

「ちょっとパー子、どこ行く気？」

「い、いや…。そいつらがいるから、俺はもう帰ってもいいかなーと…」

「いい訳ないでしょ。あんたはあっちで、ヅラ子と踊ってなさい！」

銀時はそのまま、ヅラ子もとい、桂のいる舞台に放り出される。

「いってゝ…」

「おお、銀時。スケツト団だけじゃなく、生徒会のメンバーまで呼んで来たのか」

「生徒会は成り行きだよ」

「ちょっとオ、パー子にヅラ子、ちゃんと踊んなさいよ！」

あず美が言うと、銀時と桂は、それぞれ答える。

「わーってるわよ、アゴ美」

「違うわパー子、アゴ代だ」

「あず美じゃコラアアッ！！」

一方、ボッスンと椿は、店の外で呼び込みをしていた。

「かまっ娘倶楽部でーす、いらっしやいませー」

ボッスンはにこやかに言うが、椿はぼーっとしたまま立っている。

「ほらサス子、おまえも呼び込みしなさいよ」

声を掛けると、椿は口を開いた。

「かわいいー」

「ちょっと待て!!」

ボッスンは、椿の両肩に手を置く。

「客の呼び込みだって言ってるだよ! こういう場合は、いらっしやいませーとか、ようこそーが普通だろ!!」

「会長への狼藉。殺すぞ」

店から希里が現れ、ボッスンの首にクナイを突き付ける。

「怖いって!」

『キリ子、勝手に出るな。次の注文だぞ』

透かさず、スイッチとヒメコが現れる。

「中が早く終われば、おまえも呼び込み出来るんじゃない？」

「……それもそうだな」

（助かった！ヒメコ、スイッチ！！）

希里が店に戻って行き、再び呼び込みを始める。

「かまっ娘倶楽部です！！」

「ようこそー」

先程と比べ、椿も笑って言うようになった。

が、「いらっしやいませー」と「ようこそー」しか言えていない。

「おい、藤崎が女装して呼び込みしてるぞ」

笠を被った高杉が、隣にいる刹那に言う。

刹那は、やや大きめな鞆を持っている。

「ほんとだ……！しかも隣にいるのって、佐介くんだよね」

「椿……！？あれがか！？」

女装した椿を見て、高杉は驚く。

「よく分かったな」

「声でね……」

「まア、今は関係ねエ。それより、笛吹のどこに行くんだろ？」

「うん。パソコン直してもらおうと思ってるの」

鞆の中のパソコンを見た後、「行こうか」と言い、歩いて行く。
かまっ娘倶楽部にスイッチがいることに、2人は気づかなかった。

それから数時間後。

夕方になり、西郷から帰りの許可が出た。

「あー、やっと終わった」

銀時と桂は、化粧を落とし、いつもの着物姿に戻ったが、ボッスン達は、まだ女装をしている。

『こんなに長くなるとは思わなかったな』

「全くだ。早く帰って着替えてーよ」

「えー？着替えるんかー？」

ヒメコは、露骨に残念がる。

「当たり前だろ！残念がってんじゃないよー！！」

「また何かあったら呼ぶからな。そんな時は、頼むぜ」

「頼まれても来ねーよー！！」

手を振る銀時に、ボッスは怒鳴るように言い返す。
横ではスイッチが、バイト代を数えていた。

「俺もそろそろ帰るわ。じゃあな、ヅラ子」

「ヅラ子じゃないヅラだ。間違えた、桂だ！」

桂は、ボッスン達が帰って行った方向を見つめる。

「佐介くんは、かなり人気だったな……」

ボッスンと椿の呼び込みで、店は大盛況だった。

客の間では椿が大人気で、卒業したら、ぜひ働いてくれ、との声もあつたらしい。

「次は負けんぞ、佐介くん……！」

何故かライバル心を燃やす桂だった。

あの素晴らしい女装をもう一度（後書き）

椿は女装したら、本物の女の子みたいでめちゃくちゃかわいい!!
早くサス子がアニメに出てくれないかなあ……。。

チェンジパニック その1 (前書き)

携帯を修理に出していたので、かなり遅れてしまいました……。。

チェンジパニック その1

「さくで、新しい薬でも作るか」

化学室でチュウさんこと中馬先生は、パイプを加えながら、今日も怪しい薬を作る。

「イレカワールは、人格が入れ替わるからな…」

ピルケースに入った錠剤を見ると、ふと、アイデアが浮かんだ。

「そうだ。こういうのをやってみるか！」

中馬先生は早速薬を作り始めるが、その直後に爆発が起きた。

「つー訳で出来たのが、この『イレカワール改』だ」

「出来た経緯が分かんねーんだけど!？」

完成した薬を持って、中馬先生はスケット団の部室に来ていた。

『今回の薬は、どんな効果があるんですか?』

「ああ。イレカワールは、人格が入れ替わる。イレカワール改は、性格が入れ替わる」

「また凄ェ薬作ったな…」

「で、これをおまえらに試してもらいてーんだけど」

「は!?! やだよ!?!」

「修学旅行の時えんらいことになったの、もう忘れたんか!?!」

ボッスンとヒメコは、猛反発だ。

「大丈夫だって。マウス実験でも成功してるし、今回ののは、1日程で元に戻るから。……多分」

「多分!?! 今、多分つつた!?!」

「爆発はしねーぞ。これは言い切れる」

『それだけを言い切られてもな』

中馬先生は、イレカワール改を別の瓶に入れ替える。

「ん? チュウさん何やってんだ?」

「ただ飲むだけじゃつまらねえからな。ロシアンルーレット風にしてみた」

瓶の中には、イレカワール改と同じ色と形をしたタブレットが、幾つか入っている。

「イレカワール改が8割、あとの2割が飴だ」

「8割って！イレカワール改ばっかじゃねーか！！」

中馬先生は瓶を振り、ボッスンに投げる。

「万事屋の連中辺りと、一緒に飲んでみる」

「嫌だって！！」

瓶をキャッチし、透かさず言う。

「この実験は、なるべくこっちの世界じゃやりたくねえんだよ。オレあ、上に目エつけられてっから」

「知るかよ！」

「アタシらをマウス扱いすんな！」

「あー、そんなこと言っているの？」

恒例のようになった、脅し文句を続けた。

「スケツト団の顧問やめちゃうよ？」

（うっ…！！）

この一言を言われると、言い返すことが出来なかった。

「顧問^{オレ}がやめたら、スケツト団は廃部で」

「わーったよ！やればいいんだろ！？」

『相変わらず、最低な人だな』

「……と、いう訳で、この薬一緒に飲んでくれ」

万事屋に行き、ボッスは銀時達に言った。

「飲む訳ねーだろ！そんな怪しい薬！！」

「頼むよ、飲んでくれ。でないと、スケット団が廃部になっちまうんだよ！」

ボッスは涙目で言うが、銀時は知らん顔だ。

「あ？そんなん知るかよ」

「協力してくれよ、この前、かまっ娘倶楽部のバイト手伝っただろ！？」

「状況が違いすぎだろーが！！」

それにな、と銀時は続けた。

「おまえ、部活と命、どっちが大事なんだ？そんなにいらねー命だったら、ブックオフ辺りにでも売ってこい」

「命売れるか！しかも、何で本屋が出てくるん！？」

『命に別状は無いらしいぞ』

「性格が入れ替わるのって、面白そうネ！」

「命に別状が無いんなら、飲んでやってもいいぞ」

神楽と白哉は、興味を示している。

「おい、何興味持ってたよ！」

「まあ銀さん、ここは協力してあげましょうよ」

新八はあまり、危機感を持っていなかった。

「分かってんのか新八。早い話が、人体実験だぞ、これ！」

「あ、言われてみれば…」

「だいたい、この薬作ったマッドサイエンティストはどうした!？」

銀時は中馬先生をマッドサイエンティスト呼ばわりする。

尤も、それは事実だが。

「チュウさんな、この薬渡した後、出張言うて、出掛けて行ったで」

『帰ってくるのは、明日らしい。実験が見れず、残念がっていたぞ』

「ほい、これ銀さんの分」

ボッスンは、瓶からタブレットを出し、銀時に渡した。

『全員受け取ったな』

「誰と誰の性格が入れ替わるか、楽しみネ！」

「ほな、同時に飲むで」

7人はタブレットを口に入れ、飲み込んだ。
その直後に、全員雷に打たれたようになり、脱力した。

「……あれ？何とも無いアル」

しばらくしてから、神楽達は目を覚ます。

「ほんとだ」

『ただの飴だったようだな』

「今の前振り何やねん！！」

「あれ？銀さんとボツさんが、まだ脱力してるんですけど…」

見ると、銀時とボツスは気を失っている。

『どうやら、この2人がイレカワール改を飲んだらしいな』

「じゃあ目を覚ましたら、銀時は佑助の性格になって、佑助は銀時の性格になってるのか…」

白哉は、2人を眺めながら呟く。

「早く見たいネ。卑屈になった銀ちゃんと、駄目人間になったボルサリーノ」

「嫌な言われ方やな……」

「うーん……」

ボッスンは、ぼんやりと目を開けた。

『おつ、ボッスンが目を覚ましたぞ!』

死んだ魚のような目をしたボッスは、辺りを見回す。

「凄いアル!目が死んでるネ!」

「どんな気分や?ボッスン」

「え…俺、銀さんだけど?」

「は!?!」

「あれ!?!俺がいるぞ!どうなってんだ!?!」

目の前にいる銀時を見て、ボッスは喚く。

「ぎゃあアア!?!何か知らねーけど、俺ボッスンになっちゃまったアアア!?!」

「おい、どうなってんだ!?!」

「まさかボッスン、自分を銀さんと思い込んでるんか？」

「…うーん」

全員が混乱していると、銀時が目を覚ます。

「あ、銀ちゃん！」

「まさか銀さんも、自分のことをボッスンと思い込んでいるんじゃない？」

「俺が銀さんだって言ってんだろ！」

「お、おい。おまえは誰だ!？」

白哉は念の為、銀時に訊いた。

「オレ、ボッスンだけど」

銀時は、ややテンパった顔で、自身を指差す。

「ええええ!？」

「あ!オレだ!」

「何で、俺が目の前にいやがんだ!？」

銀時とボッスンは、お互いに指差しながら叫ぶ。

「どないなっとなねん、これ!」

「こっちが聞きたいですよ！」

「どうすんだ！？銀時と佑助、おかしくなっちゃったのか！？」

その頃、出張先に向かう為、電車に乗っていた中馬先生は、鞆から携帯を取り出していた。

「さくて、錫はどうしてるな」

出張の為、娘の錫を実家に預けており、様子確かめようと思った。

「ん……？」

鞆の中に、タブレットの入った瓶があった。

「あれ？これは…」

取り出して見ると、思わず声を上げた。

「何で、これがここに！？じゃあ、さっきボッスンに渡したのは…」

その瓶は、イレカワール改を入れた瓶だった。

チェンジパニック その1 (後書き)

明日ジャンフェス行ってきますーす。

チェンジパニック その2 (前書き)

前回のあらすじ

スイツチ

『チュウさんが作った、性格の入れ替わっちゃう薬、イレカワール改を脅しにより、半分強制的に飲むことになったスケツト団。万事屋も巻き込んで飲んだ結果、ボッスンと杉田に異変が起きちゃった
(笑)』

チェンジパニック その2

「は!?!? 薬間違えた!?!」

ヒメコは中馬先生に連絡をし、状況を説明した。
そして、それを聞いた中馬先生は、ぽつりと言った。

『…薬間違えた』

「ほんなら、銀さんとボッスンが飲んだのって、ただのイレカワールか？」

『いや…、ちよつと分かんねエ』

「分かんねエって、どういう意味や!?!」

「ヒメコ、ちよつと代われ!?!」

銀時…いや、ボッスンはヒメコから携帯を取り、叫んだ。

「おい、チュウさん!あの瓶の中にあったのって、何の薬だったんだ!?!」

『ん? 銀さんか?』

中馬先生は暢気に聞き返す。

今のボッスンは、姿と声が銀時そのものだ。

銀時も同じく、姿と声はボッスンのものになっている。

「銀さんじゃねえ！ボッスンだ！！」

『あー、どっちでもいいけどよ…』

「よくない！！」

『間違っただけの瓶には、賞味期限が切れた薬が入ってたんだよ』

「薬に賞味期限何てあるんか…？」

食べ物感覚で言う中馬先生に、ヒメコがツッコんだ。

『で、賞味期限が切れた薬やら飴やらをいろいろブチ込んだせいで、何が起きるか分かんねエ』

「飴！？飴も入れてたんですか！？」

『と言うことは、オレ達は運良く、飴を飲み込んだということか』

新八とスイッチは、驚きながら呟く。

「通話のシーンとスイッチの会話、何か被るわ…」

『おい、今喋ったのって、ボッスンか？銀さんか？』

『銀さんじゃない、笛吹だ！』

「なーにが笛吹だ、だ！！」

ボッスン：いや、銀時はスイッチに蹴りを入れる。

「ヅラみてーなことやってんじゃねーよ！てめーが喋ると、何かややこしくなんだよ！！」

『何をする！杉：ボッスン』

「分かっててわざと言い間違えんな！逆だろ普通！！」

「ほんでチュウさん、あの瓶には、ただのイレカワールも入ったんか？」

ヒメコは携帯を、耳に押し付けるようにして訊いた。

『確か入ってたな』

「じゃあ、またイレカワールを飲み直せば、元に戻るってことだな！？」

横からボッスンが言うと、中馬先生は「うゝん」とうなり声を上げる。

『薬は全部、賞味期限が過ぎてるからなあ…。普通にイレカワールを飲んでも、効かねーかもしれねえ』

「効かない！？じゃあ、どうすんだ！？」

『オレが帰ったら即、元に戻る薬を作る。だから、1日だけ、そのまま置いてくれ』

「そんな無責任な！」

『じゃあな』

ブツン、と携帯が切れ、その場に沈黙が流れた。

「……で、この後どうすんだ？」

白哉はぽつりと言うが、誰も答えられない。

「どうするも何も…。チュウさんおらんから、どうしようもないし……」

「1日だけなら、何とかなんだろう」

銀時はソファに座って、余裕そうな顔をする。

「明日になりゃ、元に戻んだろうし」

「余裕やなあ、ボッス…銀さん」

『そろそろ暗くなる。帰った方がいいな』

スイッチは窓の外を見て言った。

「じゃあ、帰るか」

『待てボッスン』

帰ろうとするボッスンに、スイッチが呼び止めた。

『その姿で帰っても、誰もボッスンだと分らないと思うぞ』

「確かに、見た目も声も、銀さんそのものやしな…」

『ここは、ボッスンが杉田、杉田がボッスンとして、1日過ごした方が得策だ』

「は!？」

銀時とボッスは、同時に声を上げた。

「ちょっと待て、じゃあ何か？俺、明日まで高校生になんのか？」

『当然だろう』

「やだよ！何で高校行かなきゃなんねーんだ！おい、ボッスン。おまえは万事屋にいなきゃなんだぞ!？」

「いいかも…」

やや嬉しそうな顔で、ボッスは同意している。

「いいのかよ!」

「まあ、銀さん。1日だけなんですから」

「そうアル。1日高校生やってくるヨロシ、銀サリーノ」

仕方ない、と言うように新八と神楽は言った。

「てめーらアアア…！人事だと思いやがって…！！」

「ほな決まりやな。向こうに帰るで、銀さん」

ヒメコは銀時の襟首を掴み、引きずるように引っ張る。

「引っ張んなって！痛エ！！」

『チュウさんが帰り次第、薬は届けるぞ』

ヒメコとスイッチは、銀時と一緒に帰って行った。

「行っちゃいましたね、銀さん…」

「上手くやってくれっかな…」

ボッスンは、上手くごまかしてくれるか、少し不安だった。

「じゃあ、僕もそろそろ帰るんで。ボッさん、何とかやって下さいね」

「お、おお…」

新八も帰り、再び室内は沈黙した。

「あ、今日は、俺が飯作る日だったな！」

白哉が慌て話題を作ると、神楽も話に乗る。

「そうだったネ！びゃつくん、何作るアルか？」

「せっかくだし、佑助の好きなもん作ってやるよ」

それを聞き、ボッスンは目を輝かせた。

「マジっスか！？じゃあ、ハンバーグと唐揚げとみかんゼリー！」

「分かった。ちょっと時間掛かるけど、全部作る」

「ありがとう！白哉さん！！！」

「……中が佑助だって分かってるけど、銀時に言われてるみたいで変な感じだな」

「同感アル」

その頃、銀時は藤崎家に到着していた。

「お邪魔しまー…じゃなくて、たでーまー」

ドアを開け、中に入り、リビングに行ってみた。

「おかえりー」

「遅かったね、お兄ちゃん」

茜と瑠海が、それぞれ声を掛けた。

「まア、いろいろあってな…」

ふと、瑠海は銀時…、いやボッスンの顔を見る。

「……？」

いつもと雰囲気の違いボッスンを、瑠海はまじまじと見る。

「あ？どうした？俺の顔に何か付いてるか？」

「いや…別に」

瑠海はたどたどしく答えた。

「無いんだったらいいよ。部屋行ってっから」

銀時は、とりあえずボッスンの部屋に行った。

「ねえ、母ちゃん。今日のお兄ちゃん、ちょっと雰囲気が違う感じがする」

「そう？」

「うん。目が死んでるし、話し方も銀さんみたいだし…」

「最近、万事屋に行ってるからじゃないの？」

茜は、あまり気にしていない様子だ。

「さてと、そろそろご飯にするわね」

「あ、うん」

こうして、修学旅行程ではないが、慌ただしかった1日が終わろうとしていた。

チェンジパニック その2 (後書き)

あらすじは、次回もやります。
次は誰に言わせるか…。

チェンジパニック その3 (前書き)

前回のあらすじ

神楽

「イレカワール改だと思って飲んだ薬は、賞味期限の切れたただのイレカワールだったネ。そのせいで入れ替わっちゃった銀ちゃんとボルサリーノは、チュウさんが帰って来る次の日まで、銀ちゃんはボルサリーノ、ボルサリーノは銀ちゃんとして過ごすことになったアル。そのおかげで、晩ご飯は豪華だったアル!」

チェンジパニック その3

次の朝、目覚まし時計の音と共に、茜の声が聞こえた。

「佑助ーっ！朝よーっ！！」

「あ？おい、ボッスン。おまえの母ちゃん呼んでんぞ…」

口にしてから、ガバツと起き上がった。

「そうだ…。俺、今ボッスンだった……」

眩き、窓ガラスを見ると、藤崎佑助の姿が映っていた。

「はあ…。今日1日だけだ、我慢するしかねエ……」

「佑助！遅刻するよ！？」

「今行く」

声を掛け、銀時は制服に着替え、リビングに行った。

「お兄ちゃん、やっと起きたね」

ソファに座った瑠海は、マヨネーズをたっぷり塗ったトーストを食べている。

「おまえ、朝っぱらからなんつーもん食ってんだ？真選組の副長で

すか、コノヤロー」

ボッスンになっていることを忘れ、銀時はいつもの口調で話してしまい、瑠海はギョツとした。

「お、お兄ちゃん…。やっぱり、銀さんみたいになってる……」

（やべエ…。素のまま話しちまった）

「どうだ、似てたか？銀さんのモノマネ!!」

慌ててごまかしたが、瑠海はジト目で見ている。

「元々、俺と銀さんって似てんだろ？どっちも地味主人公だし、髪の色と帽子取ったら、それこそキャラがねーし」

（自分で何とんでもねーこと言ってんだ、俺はアアアッ!!）

「うん…。そうだね」

（おめーは否定しねーのか!!）

「ほら佑助、早く食べちゃいな。片付かないから!」

「お、おお…」

朝食を食べた後、銀時は瑠海と一緒に家を出た。

それから数時間が経った万事屋では……。

「神楽、佑助。朝飯出来たぞーっ！」

「朝飯…？」

布団の中で眩き、もぞもぞと顔を出すと、時計を見た。
時刻は、10時を過ぎている。

「10時！？母ちゃん、何で起こして…！！」

飛び起きてから、鏡に映った自身の姿を見る。
そこに映っているのは、坂田銀時の姿だ。

「あ…。銀さんになってるんだった…」

「あ、起きたか？」

リビングから、白哉が顔を出した。

「お、おお…」

「まだ慣れないか？でも、今日1日だけだから、我慢しろよ」

「うん…」

ボッスンは着替えた後、神楽と白哉と一緒に朝食を食べた。

「おはようございまーす」

「あ、ぱっつあんだ」

食べ終わって数分後に、新八がやって来た。

「ボツさん。今日1日、銀さんらしく出来ますか？」

「向こうじゃバレちゃまずいけどよ、こっちじゃバラしてもいんじゃないか？」

不安そうな新八に、ボツスは軽く言う。

「銀さんのモノマネなら、簡単に出来そうだし」

ボツスはモノマネが得意な為、大抵の人物は演じることが出来る。

「あ！じゃあ試しに、スイッチのマネして！」

神楽が、スイッチのモノマネを要求した。

「スイッチ〜？よし、待ってろ」

一度咳払いをし、ボツスはスイッチのモノマネをした。

「『さすがスイッチ』のコーナ〜☆」

音声合成ソフトのような声で言った。

「うわっ！似てる！！」

「どうやって、こんな声出したんだ？」

「凄いアル！銀ちゃんがスイッチになったネ！！」

3人は、それぞれ感想を言う。

「銀ちゃんがスイッチって…。銀さんもスイッチも、声が一緒だろ……」

ボッスンが呆れていると、電話が鳴った。

「電話だ。佑助、出てくれるか？」

「銀さんみたいに出て下さいよ」

「スイッチみたいに出るネ！」

「うっせえ！いっぺんに言うな！！」

怒鳴りながら、ボッスンは受話器を取った。

「万事屋だす！」

微妙にスイッチに近い声で、電話に出る。

『……おまえ、笛吹か？』

（げ！！高杉さん！？）

電話の相手は、高杉だった。

「あ、あの…その…」

テンパっていると、電話の向こうから話し声が聞こえた。

『おい、笛吹が出たぞ』

『和義くんが？今学校じゃないの？』

（あれ？刹那さんもいんの？）

そう思っていると、刹那が出た。

『もしもし、和義くん？』

「よ、よお、刹那。どうした？」

ボッスンは慌てて、銀時の振りをした。

『あれ、銀時さん？さっき晋助さんが、和義くんだって…』

「間違えたんじゃないの？ほら、オレとす、…杉田って声が一緒だろ？」

苦し紛れに近いが、咄嗟に言った。

「で、何か用があったんだろ？」

『あ、うん。実は、パソコンが壊れちゃったから、和義くんに直してもらおうと思ったの』

「あー、パソコンが…」

『この前部室に行った時、誰もいなかったの』

(かまっ娘倶楽部に行ってた時か…)

実は近場にいたのだが、お互いに気付くことはなかった。

『授業が終わったら、また連絡してみようと思ってるけど、万事屋^{そっち}に来たら、一応伝えてくれる?』

「お、おう。伝えておく」

電話を切り、ボッスンは大きく息をついた。

「焦ったあ…。バレてねーよな?」

「大丈夫だと思いますよ」

「ボルサリーノの顔、面白かったネ!」

神楽は、先程のテンパったボッスンの顔を思い出して、爆笑していた。

同じ頃、銀時は殆ど上の空で授業を受けていた。

「あ…。やっと昼休みか……」

「やっとして、銀さんずっと、ぼけーとしてただけやろ」

脱力しているのを見て、ヒメコは呆れながら言った。

『予定では、チュウさんは今日の夕方に帰って来るそうだ』

「早く帰って来いよ、頼むからさ」

「すぐ帰って来るって。それより、早よお昼食べよ」

『お兄ちゃん電話だによん』

『む？電話だ』

モモカの着ボイスに、スイッチは携帯を取った。

「ホンマ紛らわしいわ。スイッチの台詞と電話のシーン」

『刹那さんからだ』

「刹那から？」

電話の相手を聞き、銀時は反応する。
スイッチは、通話ボタンを押した。

『刹那さん？』

『あ、和義くん？今いい？』

『大丈夫です。今昼休みなんで』

『パソコンを直してもらいたんだけど…。今日、大丈夫？』

『すみません、今日は用事があるので無理です』

『そう…。じゃあ、別の日をお願いするね』

「おい、用事ってなんだ？」

携帯を切ったスイッチに、銀時が聞いた。

『今日はモモカの野外ライブだ。オレはそれに行く。だから今日は、万事屋には行けない』

「てめー、俺とボッスンのことより、ライブの方が大事か！」

『オレ達は何も出来ないんだから、しょうがないだろ！』

詰め寄る銀時に、スイッチは夢中で言い返す。

『お兄ちゃん電話だによん』

『ん！？誰だ、こんな時に』

携帯を見ると、電話の相手はモモカだった。

『スイッチ、今いいかい？』

『…ああ。どうした？』

『今日の野外ライブ…中止になったんだ』

『中止!?!』

中止という言葉聞き、スイッチは驚く。

『何か、台風が近くて、今回は中止らしいんだ。今日も来る予定だったんだろう?』

『そうだ。だが、自然現象では仕方ない。……次のライブを楽しみにしているよ』

携帯を切り、スイッチは顔には出していないが、残念そうにうなだれる。

「どんだけショックなんだよ!」

「あ、アタシも電話や」

バイブ音に気付き、ヒメコは携帯を出す。

「今回、通話のシーンばっかだな…」

銀時が呟くと、ヒメコは声を上げた。

「あ! チュウさん!?!」

「何!?!」

「どないしたん? 早よ帰れるようになったんか?」

『それがな…。すんげー言いづれーんだけど…』

気落ちしたような、沈んだ声が聞こえてくる。

『出張先に、台風が直撃してよ…。土砂崩れが起きて、電車が動かなくなっちゃった』

「……え？」

3人の鼓動が、だんだん速くなる。
中馬先生は続けた。

『帰りたくても帰れねえからよ。ハハハ、その…悪イけど…。あと
数日待ってくれ』

「うえええええ!？」

入れ替わり、延長決定。

チェンジパニック その3 (後書き)

瑠海がトーストにマヨネーズをかけているのは、アニメのOPを意識しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3729w/>

SILVER DANCE

2011年12月24日22時52分発行